

# 心理学における「創発」概念の系譜：ミル、バイン、スペンサー、ルイス

## Genealogy of 'Emergence' in Psychology: Mill, Bain, Spencer, and Lewes

森 秀 樹\*  
MORI Hideki

The concept of "emergence" derives from the concept of "heteropathic" in J. S. Mill, which Lewes has come to call "emergent". But, the succession of this concept did not go straight from Mill to Lewes. The purpose of this paper is to follow the interaction among Mill, Bain, Spencer, and Lewes in the field of physiology and psychology, and to make clear the process of formation of the "emergence" concept. Bain developed Mill's concept in the area of psychology. By complementing psychology with physiology, he found that what is considered "spontaneity" is established by a "link" between an unconscious movement caused by the nervous system and a pleasure that the movement brings. While Bain considered the emergence only in the domain of Psychology, Spencer extended it to other domains such as biology and sociology and thought of it as a general rule that holds across domains. By following such Spencer's idea, Lewes extended the potential idea of Mill and Bain and established the "emergence" concept.

キーワード：創発，J・S・ミル，バイン，スペンサー，ルイス

Key words : emergence, J. S. Mill, A. Bain, H. Spencer, G. H. Lewes

### 序章 ミル、バイン、スペンサーの相互影響関係

創発（emergence）の概念史的研究によれば<sup>1</sup>、この概念はJ・S・ミルにおける異結果惹起的（heteropathic）という概念に由来し、それをルイスが創発的（emergent）と呼ぶようになったことに由来する（Lewes1875a:98）。そして、後のイギリス創発主義はルイスのこの概念を受け継いでいるとされる。

だが、この概念の継承はミルからルイスへと一直線に進んだわけではない。ミルは、複合的な原因によって引き起こされる結果を考えるにあたって、部分と全体の法則が同質（homogeneous）であり、原因の合成が可能な場合と、（個別の合成に還元できない）異結果惹起的法則（heteropathic law）とを区別した（Mill-7:374f.）<sup>2</sup>。例えば、硫黄と木炭と硝石を特定の割合で混ぜ合わせると、これらの物質が別々にある場合とは異なり、特定の条件下において爆発するという性質を帯びるが、これが異結果惹起的法則の例である（Mill-7:336f.）。さらに、機械とは異なり、有機体や生命はその構成要素の単なる合成からは構成されない（Mill-7:371）。さらに、社会のあり方についても、各個人のふるまいの組み合わせ方によって様々になるため、各個人のあり方を総和するだけでは予測することはできない。ミルは異結果惹起的法則を配置（collocation）や布置（juxtaposition）と結びつけて説明しているが、その配置は有機的な関係として理解されている。

これに対して、ルイスは布置（juxtaposition）に注目

しつつも、それをさらに環境（medium）との関係の中で考察した。そして、有機体の構成要素の布置のみならず、有機体が環境との動的な関係の中に置かれることにも注目した（Lewes1874,113ff.,236ff.）。ルイスはミルを受容しながらも彼の着想をさらに展開させている。その際、この展開に影響を及ぼしたと考えられるのが、バインとスペンサーである。創発という概念は、ミル、バイン、スペンサー、ルイスといった思想家たちの相互影響関係の中で、徐々に形成されてきたのである<sup>3</sup>。

創発概念の形成過程については幾つかの観点を設定することができるが、本論文においては、特に、有機体（organism）を孤立したものとしてとらえず、環境との相互関係を繰り返し広げながら、動的に展開していくものとしてとらえる着想の成立に注目する。このような着想は、生理学や心理学における議論を中心として展開されている。そこで、以下においては、創発概念を「環境との関係における有機体」という観点から考察するために、ミル、バイン、スペンサー、ルイスが生理学や心理学についてどのような考えをもっていたのかを順次検討していくことにする。

彼らは相互に影響を及ぼし合いながら、イギリスの連合主義心理学の伝統の中で心理学を考えている（cf. Mill-7:853）。1829年、ミルは父親ジェームズ・ミルの『人間精神の現象の分析』を自ら編集し、出版している。ここに見られる連合主義心理学の発想は『論理学体系』における思考のあり方に大きく影響している。スペン

\* 兵庫教育大学大学院教育実践高度化専攻社会系教科マネジメントコース 教授

令和2年4月23日受理

サーは『心理学原理』において表象の分化を連合心理学的な仕方でも説明しているが (Spencer1872:446f.)、この考え方はミルにおける異結果惹起的法則の説明と類似している。さらに、ペインは、『人間精神の現象の分析』の編集に協力するとともに (Mill-9:lviii)、1855年に『感覚と知性』、1859年に『感覚と意志』を出版する。その直後にミルとスペンサーはペインについての書評を公表している<sup>4</sup>。ペインの著作とこの書評はスペンサーの心理学の形成に大きな役割を果たすことになったのである。

スペンサーの「総合哲学」は『第一哲学』、『生物学原理』、『心理学原理』、『社会学原理』、『倫理学原理』という一連の著作からなるが、中でも、『第一原理』(1862,1867)は「総合哲学」という全体の枠組みを示す役割を果たしている。だが、『心理学原理』の第一版が出版されたのはそれに先立つ1855年であり、当初は独立した著作として構想された。後に「総合哲学」となる一連の著作は『第一哲学』における全体構想に基づいて順に執筆されたわけではないのである。むしろ、『第一原理』に取り込まれることになる諸論考「発展：その法則と原因」(1857)、「超越論的生理学」(1875)、「星雲仮説」(1858)、「有機的形式の法則」(1859)が発表されるのは1855年から1860年にかけてである。丁度この時期に、スペンサーは試行錯誤の中で全体構想を練り上げていったのである。ペインが二つの主著を出版したのが丁度この時期であった。出版直後にスペンサーはペインの著作に目を通し、「ペインの『情緒と意志』」(1860)という書評を発表するとともに、そこから『心理学原理』を改訂するアイデアを得ている。スペンサーは「総合哲学」の全体構想に合わせて『心理学原理』の書き換えを行い、1872年に大幅に組み替えられた第二版を出版している。「総合哲学」に取り込まれるスペンサーの心理学は、「発展仮説」といった進化論的な発想のもとで、ミルとペインの心理学と対決する中で、形成されたのである。そして、ルイスの「創発」概念はこのようにスペンサーの思想の影響下において彫琢されたと考えることができる。

本論文の目的は、ミル、ペイン、スペンサー、ルイスの生理学や心理学における主張をたどりながら、相互の関係を整理することを通して、ルイスの創発的なものが、彼らの生理学や心理学における相互影響関係を母胎として生まれたのであり、その際、スペンサーが相互につなぐ要の役割を果たしたということを明らかにすることである。

## 第一章 ミルにおける「異結果惹起的法則」とその限界

ミル自身の心理学についての考えは『論理学体系』の

第六編第四章「心 (mind) の法則について」と第五章「性格学、あるいは、性格形成の科学について」から読み取ることができる。さしあたり、心とは「感じるもの」(that which feels)であり、心において「感じられるもの」である感じ (feeling) が心理学の対象となる。そして、ミルは「心の状態は全て、心の他の状態、あるいは、身体の状態によって直接引き起こされる」とするが、心の法則 (laws of mind) は中でも「心の状態が心の状態によって引き起こされるとき」の法則であるとしている (Mill-8:849f.)。

ミルによれば、感じには思考 (thought)、情緒 (emotion)、意欲 (volition)、感覚 (sensation) が含まれる (Mill-8:849)。ミルは、感覚は「我々の組織の、神経系と呼ばれる部分の興奮 (affection)」であり、それは外的対象ないし身体によって引き起こされるため、身体の法則に属するとしている。これに対して、思考、情緒、意欲が生理学的基盤を有するか否かについては議論が分かれているとしている (Mill-8:850)。もし、これらが全て生理学によって説明されることになるのであれば、心理学は生理学に解消されることになる。コントはこのように考え、心理学を抹消したが、ミルは生理的なものと心理的なものとの関係はまだ分かっていないことの方が多いとして、この点については断定をさせている。

結局、ミルは、心の本性に関する「思弁」ではなく、心的現象の法則について考察すべきだとする (Mill-8:850)。ただし、この選択は、心の背後にある仕組みについてはもはや思惟しないという帰結をもたらすことになる。その結果、ミルにおいて心理学の主題は、先行する心の状態がどのような心の状態を引き起こすのかという「契機の斉一性」(uniformities of succession)の探究だということになる。そして、彼は心の法則の最も一般的なものとして以下の三つを挙げている (Mill-8:850ff.)。(1)「全ての心の印象には対応する観念がある」。すなわち、いかなるものであれ、心に感じられれば、それは何らかの観念を形成する。(2)「観念連合の法則」は、内容や継起が近接した観念は相互に引き起こしやすいというものである。例えば、二つの印象が頻繁に同時にまたは継起して経験されると、一方は他方を引き起こしやすい。そして、印象の連合の頻度が大きいほど、連合は強くなるとされる。(3) 複数の単純観念が、それらの寄せ集め (「原因の合成 (Composition of Cause)」)とは異なった新しい観念を引き起こすことは「心の化学 (mental chemistry)」と呼ばれる。「多くの単純観念を集めて形成される複合観念が、実際に単純であるように見えるときは、この複合観念はこのように単純観念から結果する (result from) とか、発生せしめられる (be generated by) とか言うべきであって、単純観念からなる (consist of) とすることはできない」(Mill-8:854)。

ただし、このような法則が成立するのは状況からの影響を無視できる場合のみである。というのも、実際の心は他の契機によって別な結果を引き起こすことも多いからである。ミルは以下のような場合を指摘している。(1) 状態によって同じ原因が異なった結果を引き起こす。(2) 個人の経験してきた歴史によって結果が異なる。(3) 人が違えば、身体組織も違うが、その違いによって異なった結果が生じる。心は生理的なものによって成立するが、心的なもののみを取り扱う心理学は生理的なものによる影響や心が形成されてきた歴史的経緯を考慮に入れることができないというのである。結局、ミルは心理学に関しては、経験的に近似的な法則しかえることができないとしている (Mill-7:856)。

これに対して、ミルは「人間本性の経験的法則は近似的一般化にとどまるのに対して、性格の形成についての法則は普遍的な法則である」(Mill-8:863) とする。ミルは性格の形成についての科学を性格学 (Ethology) と呼び、これを心理学と対比している (Mill-8:869)。

一見すると、性格学は心理学を特定の状況に応用する学問であるかのように見える。「性格形成の法則は……心の一般的法則から帰結する派生的法則である」(Mill-8:869) や「演繹的科学としての性格学は、実験的科学である心理学の系の体系である」(Mill-8:872) という記述もそれを裏付けるように思われる。しかし、ミルは「一方において、心理学は……観察と実験との科学であるが、他方、……性格学は……演繹的科学である」(Mill-8:870) と述べており、この解釈に反する。ミルによれば、性格学は、最も一般的な原理には至らないが、「中間的な原理」を取り扱う。すると、性格学は心理学よりもより一般的な原理を取り扱うことになる。ミルによれば、「性格学の大きな問題は、心理学の一般的法則から必要な中間的な原理を導出することである」(Mill-8:873)。心理学の一般的法則は観察されうる個別的な法則にとどまる。それに対して、性格学は心理学の法則が前提とせざるをえないような原理を、心理学の法則から抽象化することを課題とする。「性格形成の法則は……心の一般的法則から帰結する派生的法則である」や「演繹的科学としての性格学は、実験的科学である心理学の系の体系である」という記述はこのような仕方で解釈されねばならない。ただし、ミルによれば、性格学は物理学に見られるような最高次の普遍性をもつことはできず、傾向性を示す「中間公理」とにとどまるとしている。

心の法則について経験的な方法で探究する場合には近似的一般化にとどまらざるをえない。また、性格の形成を具体的に探究しようとすると、個々の人間を規定している環境が複雑であるため、規定要因を枚挙することができないまま探究することを余儀なくされる。だが、これらの探究が科学として求める法則は本来、普遍的な

法則でなくてはならない。だとすれば、ミルが性格の形成についての普遍的な法則ということで念頭においているものは観察や実験によって得られる一般的法則ではなく、逆に、それらの経験的法則が前提とせざるをえない法則だということになる。だからこそ、ミルは性格学の確証は「演繹的方法」によるとしているのである。これは一般法則から出発し、その帰結を特殊な経験によって検証するというものである。

だが、同様のことは心理学にも当てはまる。心の「斉一的法則」についても、経験的に近似的な法則のみならず、それらが想定せざるをえない原理を考えることができよう。だとすれば、ミルは、心理学と性格学をその対象領域で区別しているのみならず、さらに、原理的に異なる学問であると考えているが、それは不十分だということになる。まず、一方において、心理学においても性格学と同様に「中間的な原理」を探究することが可能である。そして、他方において、性格学の領域で経験と観察に基づく一般的法則を探究することもまた可能である。このことは、性格学が「境遇の特殊な事情から生ずる性格的帰結」の研究やこの世に見いだされる種々の型の研究を行うというミルによる記述ともうまく合致する。さらに、ミルは性格形成の法則について「事例が十分に多数で、偶然を除去できるだけではなく、さらに、検討されている多数の事例がたまたま類似しているため妥当だと考えられているにすぎないような事情も除去できるのでなければ、これらの結論は単なる近似的な一般化であることを除いては信頼するに足りない」(Mill-8:866) と述べているが、このことから、性格学が経験的科学としても遂行可能であるということを読み取ることができる。結局、ミルは心理学と性格学の領域において経験的に一般的な法則を探究しつつも、それらから、心理学や性格学が想定せざるをえない法則を抽出しようとしていることになる。そして、その法則はより単純な法則からの合成でなければ、異結果惹起的法則となることになる。そのようにして得られた法則は心理学や性格学の具体的な遂行において、基本的な要素として機能することになる。

ミルは創発的なものを心理学の領域では連合心理学の枠組みの中で考えていた。そこでは、心を支える生理学的な機構は考察の外に置かれており、有機体は自律的な主体と見なされていた。だが、ミルはその限界にも気づいており、個人の置かれた状況、歴史、身体といった諸条件によって、心理学の法則が変様することも注記していた。心理的な法則は個人の身体的な差異によって現れ方が異なるし、環境や歴史の背景のもとでも心理的な法則が変様するのである。性格学は、歴史や文化が性格に及ぼす影響についての一般法則を抽出しようとするものとして構想されていた。その限りにおいては、



有機体を環境との相互作用の中で考えるという着想が芽生えてはいたと言える。しかし、身体的な差異は生理学の研究が不十分であるためという理由でこれ以上考察されなかった。また、環境や歴史の背景の問題は性格学という仕方では主題化されてはいるが、具体的な内容は論究されないままであった。いずれにしても、この着想は局所的な問題にとどまり、他の領域にも共通するような普遍的な問題としては取り上げられてはいない。また、ミルは異結果惹起的であると考えられる心理学や性格学の諸法則を原理的なものと見なしており、諸要素の相互関係において動的に変容するようなものとしては考えてはおらず、その点で限界があった。

## 第二章 バインにおけるミルの受容とその限界

フォン・ペーアによる発生学の発想は生理学にも影響を及ぼした。カーペンターの『一般及び比較生理学原理』はフォン・ペーアの発想をイギリスで広める役割を果たした。ミルが生理学から距離を置いていたのに対して、バインはカーペンター経由で生理学を心理学に取り入れ、生理学的心理学の成立に寄与した (Bain1904:164)。バインは、『感性と知性』と『情動と意志』、さらに、これらをまとめた、『精神科学』などの著作によって、内省心理学から実験心理学への移行に大きな役割を果たしたとされる<sup>5</sup>。そして、彼の両著作が採用した章立てはその後の心理学概説書に標準を与えるものとなった<sup>6</sup>。

ミルは、心理学が生理学に還元される可能性に言及しながらも、心理学と生理学との関係については不明な点が多いとして詳論しなかった。それに対して、バインは、積極的に生理学の知見を取り入れることで、この可能性に積極的にコミットする。そして、彼は、心的な活動の基盤には神経系の働きがあるとし、「心身並行説」を唱えている。さらに、彼は、神経系の中でも、脳が主要な役割を果たすとしている (Bain1855:10f.)。

『感性と知性』は心を、感じ (Feeling)、意志 (Will, Volition)、思考 (Thought) からなるとしている。伝統的な哲学や内省的心理学では、思考が心の中心であるとされたが、バインは、心の働きの基盤となるのは、感覚 (Sensation) や情動 (Emotion) を含む感じであるとした (Bain1855:1)。神経系で様々な出来事が生じるのに合わせて、心の中では様々な感じが同時的あるいは継時的に生成する。五感からの刺激は感覚を、身体の活動は筋肉の感じを引き起こし、それがさらに新しい感じを引き起こしていく (Bain1855:vf.)。バインはこのような状態を表現するのに「意識の流れ (stream of consciousness)」という表現を用いている (Bain1855:359)。

「意識の流れ」における様々な感じの生起は意志や思考といった他の心の働きの起源となる。バインは知

性の発生について四つの法則に言及している。1) 「近接 (contiguity)」において現れるものは「連合」し、観念を形成する (Bain1855: bk.2 chap.1)。2) 心には類似した過去の経験を再生する傾向がある (Bain1855: bk.2 chap.2)。3) 近接や類似によって連合しているものはそれらが重複するほど再生されやすくなる (Bain1855: bk.2 chap.3)。4) 心は連合に基づいて、新しい結合を想像することができる (Bain1855: bk.2 chap.4)。これらの法則によって、知覚や想像が成立することになる。

以上のように、バインは、生理学の知見に基づいて、心は神経系に依拠していると考えているが、心的なものの説明においては連合心理学の枠組みの中にとどまっている。だが、バインは意志の起源という問題を取り扱う中で、生理学的なものや心理学的なものをつなぐ発想に至っている。

そこで、バインは意志の原初形態を、「運動の自発性 (Spontaneity of movement)」と「快不快」との結びつき (link) にあるとしている (Bain1859: 327,355)。バインによれば、意志は最初から存在しているわけではない。そもそも、幼児は無力であり、何を指すべきかも分かっていない。意志の力の基礎が与えられるのは「筋肉の活動の自発性」によってである。とはいえ、「筋肉の活動の自発性」と呼ばれる現象は神経系によって筋肉の活動が無目的にランダムに引き起こされることでしかなく、意志ではない。だが、ランダムに引き起こされた現象が主体にとって何かの価値 (快) を偶然もたらすことがありうる。このような、動きと快との偶然の結びつきはやがて「連合」を形成し、そのような状態を再現しようとするようになる。初めはこの試みは失敗するかもしれないが、何度も反復する中で、筋肉の活動が目的をスムーズに達成するようになる。主体の中に目的を達成する仕組みが形成され、それが習慣化するというのである (Bain1859:359f.)。バインはこのようにして「意志力の成長 (growth of the voluntary power)」が生じるとしている (Bain1859:bk.2 Chap.1)。心が自発性をもつわけではなく、むしろ、イニシアティブを取るのは神経系なのである。このように、バインは生理学的心理学を主張しており、人間に関する科学は最終的には生理学に還元されることになる (Bain1872a:41)。

連合心理学においては要素的なものがどのようにして連合し、新しい上位の観念が生じるのかが課題となってきたが、以上のように、バインは意志が創発する具体相を分析している。トムソンはこの着想が創発主義者にも受け継がれていることを指摘している<sup>7</sup>。実際、バインは「試行錯誤 (trial and error)」の考え方に言及し (Bain1855: 575)、創発主義者であるモーガンは「試行錯誤」こそが進化の基礎にあると見なしてい

る<sup>8</sup>。ここにおいて、ペインは創発主義にとって重要な論点に触れていることになる。創発においては、単に「配置」によって特別な結果が引き起こされる（たまたま、ある活動が引き起こされる）だけでは不十分である。さらに、それは環境の中で特別な「意味」を生み出す（快を生み出す）のでなくてはならない。その上で、そのような現象が反復されるようなシステムが形成されることが本質的なのである。

ペイン自身は、「異結果惹起的」という語を用いてはいないものの、全体としての変化を構成する個々の変化の異質性を表現するために「異質的 (heterogeneous)」という語を用い、生命が様々な変化を積み重ねながら、全体として変化を遂げ、環境に適應するあり方を表現している (Bain1855:362, Bain1873:258.)。

また、ミルは「異結果惹起的」の具体相を示すのに「配置 (collocation)」という概念を用いていた。ペインもまた「配置」によって、単なる合成には見られないような複雑な結果が引き起こされることがあることを指摘している (Bain1855:60)。このようにペインはミルの『論理学体系』を受け継ぎ、「異結果惹起的法則」に相当する考え方も受け継いでいると言うことができる。ただし、『感覚と知性』は（ミルとは異なり）人倫科学はもちろん、環境や歴史によって変化する法則についても注目しているわけではない。

しかし、その後、1870年代になるとペインはスペンサーの著作を研究するようになり、『論理学』の第二巻では、スペンサーによる生物の定義や発達仮説に言及するようになる (Bain1873:258, 261)。そして、ペインはスペンサーからの影響もあって、「配置」による異質的なものの創出を生物一般の法則として認めるようになる。彼はこの概念を用いて、「生命力 (Vital Force)」に相当するものを理解しようとしている。「力やエネルギー」という点では、生体に何ら特別なものは何もない。だが、配置 (Collocation) という観点では、[生体は]組織化された構造をしており、特別である。新しい状況で働いているとして、分子の力や化学的力とは別の意味で「生命力」について語るのはいさぎよいことではない。しかし、要素の「生きた配置 (Vital Collocation)」と語るならば、適切であろう。そこにおいて、分子の力は新しい仕方で働くが、保存の原則に反するわけではない。かくして、神経の力は何か新しいものである。それは、既存の力と同様なものから派生したものではなく、独自の神経構造として新しく、力の現れる新しいあり方を生み出す」 (Bain1873:268)。このように、ペインは、1) 「配置」概念を介して、ミルの「異結果惹起的」という概念の一側面を受容するとともに、2) この「配置」概念に基づいて生命や心の創発を理解しようとしたのである。この二つのことは創発主義者における 1)

創発概念の受容と、2) それに基づく学問論のあり方に影響を及ぼすこととなった。

ペインはミルに潜在的に含まれていた着想を展開した。すなわち、心理学を生理学によって補完することによって、「自発性」と見なされるものが神経系の引き起こす自発的運動とそれがもたらす快との結びつきによって成立するものであることを見いだした。心理学における創発的な現象が下位の生理学的な機構や上位の主体の置かれた状況との関係の中で法則化するというのである。さらに、その後、ペインはスペンサーからの影響のもとこの着想を生物一般の法則として認めるようになっていく。このような仕方では、ペインは、ミルに潜在的に見られたものの十分に展開されなかった要素を展開するに至っている。

### 第三章 スペンサーにおける進化論的着想

#### 第一節 スペンサーにおけるペインとの対決

ペインとスペンサーはともにミルと親密な関係にあり、ミルの『論理学の体系』から大きな影響を受けた。しかしながら、この影響関係は一方的なものではなく、相互的なものであった。すでに述べたように、ペインは1855年に『感覚と知性』、1859年に『感覚と意志』を出版するが、その直後にミルとスペンサーはペインについての書評を公表している。両者は、ともに連合主義心理学の立場を維持しつつも、この著作を対蹠的な立場から取り扱っている。ミルはペインのこの著作を肯定的に取り扱っているが、必ずしもペイン自身が主張しているわけではない立場をそこに読み込んでいる。すなわち、一方において、ペインの心理学を心理学の主流を取り戻すものであると評価しながらも、他方で、彼の心理学をアプリアリ派とアポストリアリ派の対立の中に位置づけ、アポストリアリ派の代表と見なしているのである。これに対して、ミルがアプリアリ派の代表と見なすのが、ハミルトンである。結局、ミルはペインの著作を素材として、アプリアリ派批判を展開している。

これに対して、スペンサーはペインの心理学からミルとは別の側面に注目している。スペンサーの『心理学原理』の第一版は「総合的哲学」のマニフェストとなる『第一原理』に先だつ1855年に出版されており、ペインの『感覚と知性』は参照されていない。第一部「一般分析」は彼の哲学の基盤をなすべきものとして構想され、連合心理学の立場に依拠しながらも、真理概念を信頼に足るものとして解釈しようとしている。

同年、ペインの『感覚と知性』が出版され、『感覚と意志』が出版されるのは1859年である。スペンサーは後者の書評を行い、その内容を『心理学原理』の第二版にも収録している。スペンサーはペインの著作を心理学的知見のデータ「心の自然誌」(Spencer1860:242)と

見なし、そのデータを体系化することが必要だと論じている。そして、それを自身で実行しようとしている。すなわち、スペンサーはバインのように諸現象を列举するにとどまらず、それらの間の発展過程に注目する。このようにして、『心理学原理』の第二版は様々な心理的なものから知性的なものが構成されるプロセスを記述するようになる。バインの『感覚と意志』がスペンサーの心理学の変様の一つのきっかけとなったのである<sup>9</sup>。

スペンサーの『心理学原理』第一版は「一般的分析」に始まり、「特殊的分析」、「一般的総合」、「特殊的総合」が並列されている。第一版の「一般的分析」の中心をなしているのは「普遍的要請」であり、それは「否定しえないことを真理と見なすべし」と主張している。この「要請」はそれ以下の具体的な記述の真理性を保証しようとするものであった。このように『心理学原理』第一版は連合心理学の体系に依拠して、心理学による真理論や感覚によって知性がどのようにして構成されるのかといった認識論的な問題を論じていた。

だが、バインの『感情と意志』の出版とそれに対する書評などを經由して、第二版は大幅に増補がなされ、感情の進化という観点から再構成されている。すなわち、第二版では、冒頭に置かれていた「一般的分析」が最後の結論部に移し置かれている。そして、心と環境との対応関係を論じる「一般的分析」に基づいて、各自の生と外界との関係から心がいかにして発生するかを論じる「特殊的分析」や、生命の進化にともなって、身体的生から心的生がどのように分化しているかを論じる「特殊的総合」が配置されるとともに、意識と神経の相関関係を論じる「生理学的総合」が増補された上で、認識を担う知性がどのようにして心理的に構成されるのかを論じる「一般的分析」が結論として置かれている。内容的には、第一版で個別的に論じられていた主題が、第二版では互いに関連づけられ、心理的な分析に基づいて認識が可能になるという文脈の中に位置づけられるようになっていくことが特筆される。

このようにして、『心理学原理』第二版は「総合哲学」の第四巻と第五巻として再構成されることになり、有機的なものからの心理的なものの生成を取り扱うようになる。第二版は、環境の中でどのようにして感覚が発生してきたのか、また、個体における心理的なものがどのような進化をとげていくのか、さらに、心そのものが社会の中でどのような役割を果たすようになっていくのかといった心の進化について論じるようになっていく。すなわち、第二版は、第一版と同様に連合心理学に基づきながらも、経験論的な認識論を超えて、生理学から出発する進化論的心理学を展開しようとしている点にその特色がある (Spencer1870:13)。認識論の背後には心の進化が隠されているということに重点が置かれるよう

になったのである。

このように、第一版から第二版に至る配列の逆転は大きな意味をもっている。すなわち、生理学や心理学の記述を行うとされていた知性そのものが当の生理学や心理学における進歩に依拠しているものであり、生物の進化にともなって生じた心の進化が人間の認知を可能にし、真理の世界を構成しているという発想が明確になっている。その上で、第二版は、生理学的な分析のみならず、社会的な分析にも取り組んでいる。第9部第5章において、彼は社会における感情の（利己性から利他性への）進化について論じている。環境の中で社会性が発見され、それが遺伝していく (Spencer1872: § 503f.)。そして、生存のために協力した方がよい場合、動物は社会性 (sociality) や社交性 (gregariousness) を進化させる (Spencer1872: § 524-525)。また、スペンサーはこの章で「最適者生存 (survival of the fittest)」という表現を用いている。社会進化論が連合心理学の延長線上に説かれるとともに、認識が社会の中で営まれるものであるということを示している。以上において見たように、スペンサーは、バインの著作をきっかけとして、この対立を進化という観点から乗り越える観点を見いだしたのである。ここにスペンサーの思想の独自性を見取ることができる。

## 第二節 スペンサーにおける生命の進歩

「総合哲学」の第二巻と第三巻をなす『生物学原理』においてスペンサーは神経系の発生について考察している。そして、単細胞生物においてすら部分への刺激を全体に伝達する化学的変化を利用した仕組みが見られることを指摘し、そのような伝達の仕組みはあらゆる生物に必要なことであり、より高次の生物は伝達する仕組みを分化させ、独自の器官を発達させていったとしている (Spencer1867b: § 302)。このように器官が分化することによって、生物の全体としての統合は高まることになる。そのことによって、環境との関係において生存に有利な関係性が作られる (Spencer1870: § 234)。すなわち、生物は環境のある側面を看取する仕組みを形成し、環境と呼应し合う関係を作り上げる。

このような環境とのカップリングによる神経系の進化と並行して、心の進化もまた生じる (Spencer1870: § 76)。スペンサーは心の構成要素を感じ (Feeling) であるとしているが (Spencer1870:163)、それはさしあたり神経系が作用しており、その作用が看取されていることと解釈することができる。感じは、(中心部でおこる) 情動 (Emotion) と (周辺部でおこる) 感覚 (Sensation) とに区別することができる。感じは共存するとともに継起し、様々な心的現象を引き起こす (Spencer1870:250)。特に、視覚の感じは時間空間によっ



て整理されやすく、時間と空間の間で一貫した関係を形成し、それらが反復的に再認されることによって、対象やそれらの関係さらには時間・空間といった観念が生み出されることになる（Spencer1870:173,175,177,188）。認知（Cognition）なども感じの間の関係として成立する（Spencer1870:184,476）。感覚が互いに結びついていくのと同様に、情動もまた互いに結びついていき、関係を形成する。さらに、感覚と情動との関係を通して、心と環境とのやりとり（行動）も関係づけられていく。このように、「感じ」は環境との絡み合いの中で生じるものである。そして、それと相関して「感じられるもの」として環境も表象されるようになる。さらには、環境を総合的に理解するための観念（例えば、時間、空間、物質）なども生じていくことになる。

このように、スペンサーは、一方において、感覚といった要素の連合からより高次の心的現象が生じるという連合心理学の発想を受け継ぎながらも、他方において、そのような発生を有機体と環境との生理学的な相互関係における進化として解釈しなおしている（Spencer1870:189）。生体と環境との関係にうまく噛み合うように心的なものは構成され、それが進化の中で蓄積されてきたというのである（Spencer1865:213）。

神経系が発達する中で、外界の刺激に直接対応するような神経系のみならず、それらを複合的にとらえるような神経系なども発達してくる。そこでの刺激はもはや外界の刺激に一对一对応するようなものではなく、むしろ、環境内の意味あるまとまりと対応するようになる（Spencer1870:262）。しかも、そのまとまりは生物の生存にとって意味あるまとまりである。生物の神経系は、生物の生存に有利な、環境との絡み合いを形成する（Spencer1870:562,565）。例えば、抵抗の感覚は意志の意識と相関すると考えている（Spencer1872:242）。この絡み合いを表示するのが記号である（Spencer1872:240）。

生物と環境との関わりは、プロセス的なものであるため、空間的な拡がりにとどまらず、時間的な拡がりをももつ。直面する環境を認知するだけではなく、やがて、過去の状況の記憶を保持したり、将来の状況を予測したりできるようになる。スペンサーは認知について、1）現前的認知、2）現前的・表象的認知（感覚の間の関係についての認知）、3）表象的認知（関係の関係についての認知、回想）、4）再現的認知（一般化された関係についての認知）（Spencer1872: § 480）という分類をしている。また、感じについても、現前的感情、現存的表象的感情、恐怖のような回避的感情、再現的感情という分類をしている（Spencer1872: § 480）。これらの複雑化によって、単なる表象から、その吟味や、さらには再現にとどまらない想像といった思考が可能となる（Spencer1872:531, 534）。

有機体と環境との相互作用が発達する中で、有機体全体というあり方が際立ってくるようになる。そして、それを感じるということが生じるようになったとき、意識が発生することになる（Spencer1870:98）。そして、そのことによって、単なる生理学的反応から心的反応への移行が生じる（Spencer1870:294）。スペンサーは意識を（カントと同様に）継起と関連づけ、生理学的反応によって統合されたものを時間的経緯という観点から総合するようになる（Spencer1870:395,402,406）。記号の表象によりメタ次元での反省が可能になるのである。

意識が発生することによって、生物は、記憶や予測によって自己を統合することができるようになるとともに、自己と環境との関係をシミュレーションすることが可能になる。すなわち、単に外界のある出来事に反応するだけではなく、その出来事に後続することを予想することができるようになる（Spencer1872:353）。すると、試行錯誤のプロセスを大幅に簡略化することができるようになる。意識が仮想を行うことによって仮説が発見され、実験による確証が遂行される。

スペンサーにおいて、知性や感情は、このような方策にとまなうものとして、生物学的な観点から理解されている。例えば、状況が複雑になると、ある出来事に対応するという仕方での自動化が難しくなり、考えられる諸選択の間での熟慮が必要になるが、知性とはそのようなシミュレーションを行う能力である（Spencer1872:581）。また、行動と結びつく感じについても、より高次の感じを形成せざるをえなくなる（Spencer1870:583）。

同様に、スペンサーは意志を習慣の中で形成されるものと見なし、因果関係の起点としては考えていない（Spencer1870: § 217- § 220: 495-504）。とはいえ、スペンサーはそれを唯物論とは呼ばない（Spencer1870:616）。というのも、彼は心を生理学的な機構から区別し、むしろ、それらから独立したものとして理解しようとしているからである。その意味において、彼は自分の立場を唯物論でも唯心論でもないとしている（Spencer1870: § 270）。意識においては、心的なものの諸契機の間闘争として生じ、より一貫したものが生き残る。そして、意識はそうにして生き残ったあり方に従って認識を行うのである（Spencer1872:450）。

生物の発生において、生物と環境とは相互に呼応し合う関係を作り出すに至った。諸生物はそれぞれの仕方で世界と呼応しあう。そして、その事実の中には、環境と生物との相互のやりとりのプロセスが暗黙の内に刻み込まれている。感じは環境と呼応しあう生物のあり方を反映したものである。その意味で、心はこの呼応関係そのものを対象化し、認知することである。すなわち、環境における対象の認知と感じられているものは、実は生物をとりまく環境との関係の認知なのである。そして、

それはさらにこのような関係に至ったプロセスの認知でもある。このことによって、生物は、各々の位置する場所という局所にとどまりながらも、それを取りまく環境全体に関わるようなあり方に関する試行錯誤を行い、それとの間に持続的な関係を構築することができるようになる。しかも、そのような試行錯誤は偶然に任せただけではなくなる。進化とは、偶然に任せながらも、世代を重ねる中で蓄積されていった適応的關係であるが、環境や歴史の認知はこのような適応的關係の形成を個体の中で省察し、シミュレーションすることも可能になる。だが、このような認知する、記憶し、予測する生物の出現によって、環境はより複雑なものとなることになる。その中から、社会的なものが芽生え、さらには、他者を配慮するという利他性もまた出現することになった。

#### 第四章 ルイスにおける創発概念の成立

ルイスの思想形成において、ミルやバインのような初期創発主義者のみならず、スペンサーもまた大きな役割を果たした。スペンサーとルイスは個人的に親しい間柄にあり、スペンサーはルイスによって哲学や心理学に関心を広げられたと述懐している（Spencer1904a:379）。また、逆にルイスもスペンサーの著作を読み、自らの著作で引用している。ルイスにおける「創発」概念はこのようなスペンサーとの相互作用関係の中で形成された。

##### 第一節 ルイス『生命と心の諸問題』の構想

ルイスが『生命と心の問題』の第一篇『教説の基礎』を出版するのは1875年であり、それに第二篇『心の自然学的基礎』が続き、第三篇『心理学の研究』が出版されたのはルイスの死後の1879年であった。『教説の基礎』は『生命と心の問題』全体の意図（これについては後述する）と方法を述べたものである。

ルイスは『生命と心の諸問題』第一篇第一巻序論第二部「哲学の諸規則」で哲学の規則を15個列挙しているが、その第九規則が「要素の性質を、それらが属している集合の性質から結論づけることはできない。逆も然り」というもので、この箇所で、「創発的（emergent）」と「合成的（resultant）」とが対比的に用いられている。「あらゆる量的関係は成分的関係である。これに対して、あらゆる質的關係は要素的關係である。前者の結びつきは合成的なもの（Resultants）であり、[成分に]分解してみせることができる。だが、後者の結びつきは創発的なもの（Emergents）であり、それは要素の中には見出されず、また、要素から導出することもできない」（Lewes1875a: 98）。

さしあたり、この創発の定義はミルの「異結果惹起的法則」を受け継いだものでしかない。しかし、ミルやバ

インにおいて潜在的に含まれていた用法を、スペンサーの着想にならって、顕在的に拡張していくことによって、この概念は第二篇と第三編でも中心的な役割を演じることになる。

第二篇『心の自然的基礎』は「有機体を構成する物質的条件」について考察することを目的としているが（Lewes1877:v）、そこでは生命や心の領域の基礎となるのが創発的なものであるとされる。まず、ルイスは生命の基盤を「生命形質（Bioplasm）」と呼び、それは物質の「構成（composition）」によって創発するとする。さらに「生命形質」が組み合わさることでも有機体が成立する。

そして、ルイスは、これにならって、心の基盤を「精神形質（psychoplasm）」と呼び、それは独自の仕方で構成された神経系の振動（tremor）であるとしている。さらに複数の精神形質が組み合わさることで心が成立する（Lewes1875a:116）。このようにして、ルイスは、力（Force）、生命（Life）、心（Mind）という「実在の諸様式（Modes of Existence）」を区別している（Lewes1877:4）。まず、力の領域にはあらゆる実体の一般的な性質が含まれ、その運動は物理学によって、原子などの結合や分解は化学によって取り扱われる。次に、生命とは「有機的に組織された実体（organized substances）」であり、それを取り扱うのが生物学である。三つ目は「有機的に組織された動物の実体（organised animal substances）」により創発した心という新しい性質であり、心理学や社会学がそれを取り扱う（Lewes1877:4ff.）。

かくして、ルイスは「化学的現象は新しい、また、生命現象も新しい。しかし、これらの新しさは旧来の物質やエネルギーをある特殊な仕方で行き合わせることにある。同様な仕方では、心的現象は生命現象から、社会的現象は心的現象から創発するところでは、新しい物質を導入するのでも、古い物質を投げ捨てるのでもなく、組み替えが生じている」（Lewes1875a:189）と述べるに至る。下位の階層の特別な組み合わせが新しい性質を創発するというのである（Lewes1875a:190）。そして、彼は「精神症（neurosis）」、「精神病（psychosis）」といった概念に言及しながら（Lewes1877:26）、物質、生命、心の層は相互に独立しており、要素の理解によってはその統合を理解することはできないとしている。これは唯物論に対する批判となっている。

##### 第二節 ルイスにおける創発

単純な要素から複雑なものが創発することで「自然の階段」が形成され、それぞれに科学が対応しているという発想は18世紀以来の学問論に共通するものであり、バインにも見られるものであった。しかしな



がら、ルイスは、スペンサーにならって、さらに一歩進めて「生命」や「精神」といった諸領域における要素を環境との相互作用の中で考察している。ルイスは、創発は内的な「配置」だけではなく、環境や歴史によっても規定されると主張するのである。第三篇『心理学の研究』はルイスの草稿に基づいて死後に出版されたが、心が社会やその歴史によって変化するということを主題化している。

#### (1) 環境と連続する生命

まず、ルイスは有機体が環境との相互関係の内で自己形成するものであることを指摘している。ルイスは生命を「個体の内で、その同一性を破壊することなく、生じる、構造 (structure) や構成 (composition) における、一続きの連続的な一定の変化」(Lewes1875b:28) と定義している。ここには、1) 構造の継続的な変化と 2) 同一性の維持という二つの側面が含まれている。そして、ルイスは、スペンサーにならって、個体を環境 (medium) との関係において考えるべきことを強調している (Lewes1875b:40, Lewes1877:6,21)。この環境には、生物が生きている外界の状態のみならず、捕食者や餌、他の個体など様々なものが属しているであろう (Lewes1877: 102)。すると、同一性と変化という二つの側面は別々のものではないことが分かる。すなわち、平衡状態を維持しつつも、その都度変化する環境に対応するためには、常に、自己調整することを迫られ、変化せざるをえないのである。有機体は相反する作用の間の平衡状態としてのみありうる (Lewes1875b:37)。このようにして、生命は時間の経過の中で成長・発展・衰退という変化を経験しながらも、統合を維持する (Lewes1877: 5)。

#### (2) 環境と連続する心

これにともなって、心もまた環境との相互作用の中で変容するものとなる。ルイスは心の基盤は「組織化された動物的実体」にあるとし、それが感性 (Sensibility)、情動 (Emotion)、認知 (Cognition) といった働きを行うと考えている (Lewes1877:5, Lewes1879b:366)。

ルイスは感覚の創発を以下のように説明している (Lewes1879b: 39ff.)。神経系は部分相互の間で相互に関連しあった一つの全体をなしている。そのため、感覚器官への刺激はその全体へ「放散 (irradiation)」することになる。だが、刺激が反復される中で、神経系の中で反応の「集合化 (grouping)」や「協働 (co-ordination)」が生じ、刺激に対する一連の反応を引き起こす「通路 (path)」が形成されるようになる (「制限 (restriction)」)。このような「通路」への「制限」は、他のあり方とは違う独自な質をもたらすことになる。ルイスはこれを「徴 (signature)」と呼んでいる (Lewes1879b:352f.)。「カオスは集合化の法則のもとでゆっくりと、多かれ少なか

れ明瞭な形をとっていく。感覚の徴によって、あるものが他のものから区別されるようになる。そして、おのおのが局在化されるようになると、意識の中に客観の世界が創発することになる」(Lewes1879b,355)。このようにして生み出される感性はさらに、感覚、心像、観念の三つに分類される。感覚が反復され、再生されるようになると心像となる。結局、刺激の「放散」は、知覚や運動といった最終的な反応の惹起 (discharge) へと収れん (converge) することになる。このようにして、環境の中での試行錯誤を通して、生理学的な出来事と心理学的な出来事とが合致するような仕組みが形成されるというのである<sup>10)</sup>。

#### (3) 社会と連続する心

ルイスは、心理学を生理学に基づけようとしながらも、同時に、人間の心理学は社会的環境によって規定され则认为した。したがって、人間の行動は、独りで生活する場合と、社会の中で生活する場合とは、異なってくることになる (Lewes1875a:109)。また、家族の中で生活するのと、国家の中で生活するのとでも違いが発生するであろう。かくして、社会の中では文明や人倫が成立してくることになる (Lewes1875a:125)。ただし、だからといって、社会が個人の行動を完全に決定するというのではない。社会とても個人がなければ、成立しない (Lewes1875a:104)。したがって、個人は、社会との相互作用の中であり方を調整しつつ、生きることになる。

上において、刺激が反復される中で、神経系の中で反応の「集合化」や「協働」が生じ、刺激に対する一連の反応を引き起こす「通路」が形成されることを見た。このような「徴」の「形成」は独自な質をもたらすことになる。心像が記号化されるようになったものが観念であるが (Lewes1877:395f.)、ルイスはこれを社会生活の産物であるとしている (Lewes1879b:484)。そして、観念を形象化すると言語になるが (Lewes1879b:344)、言語は社会の中で媒質の役割を果たすようになり、相互の交流、しかも、時間や場所を越えた交流を可能にし、学問や社会制度を可能にする (Lewes1879b:495)。このようにして、生命の領域横断的相互作用は自然的環境のみならず、社会的環境においても行われることになる。

#### (4) 環境と融合した有機体という考え方

ルイスは、ペインが心身並行説をとっているとする (Lewes1877:344, Lewes1879a:93, Lewes1879b:265)。その場合、心理的なものと、神経の生理学的現象とは対応しあうはずである。しかし、神経系で生じている連合の働きや、反射は意識されない (Lewes1877:356, Lewes1879b:160, 182f.)。ここにおいて、ルイスは、生理的なものには何らかの心理的なものがともなうはずであるが、だからといって、全ての心理的なものが意

識されるとは限らず、無意識にとどまるものもあると考える (Lewes1879b:140)。神経系は環境や社会と相互作用を繰り広げ、様々な状態を引き起こすが、その内で意識されるのはごくわずかであり、多くは意識によるコントロールもうけつけないのである。そうすると、思考し、行動しているのは、脳だけではなく、神経系の全体であるということになる。生理学において、有機体は神経系を介して環境とつながっている (organism and medium)。そして、さらに、神経系は有機体に限定されているわけではなく、環境や社会とも領域を横断した相互関係の内にあるのであった。心は物質的基礎をもつが、この物質的基礎は脳だけではなく、神経系をも含んでいる。そして、そのことによって、環境によっても条件づけられることになる。環境・身体・心はひとつになって有機体を組成することになる。だとすれば、思考しているのは、意識ではなく、環境と融合した有機体なのである。

#### (5) 動的な均衡としての創発

有機体と環境との相互作用関係において創発が生じるということから、創発が時間的な現象であることが理解可能となる。「配置」の試行錯誤が環境とうまく組み合わせるとき、そのことがラチェットの役割を果たすようになり、特定の「配置」が、消滅することなく、持続しうようになる。この意味において、創発は「進化 (evolution)」に外ならない。そのことはルイスの記述からも傍証することができる。彼は、生体の発生を「形態的な進化であり、力動的な合意」と見なしたり (Lewes1879b:23)、心の発生を「進化」と見なしたりしている (Lewes1879b:188)。また、彼は歴史の進展を「進化」とも呼んでいる (Lewes1879b:153)。また、彼は神経系の組織化を記述するにあたって、スペンサーにならって、諸器官の「生存競争」といった表現を用いている (Lewes1877:102)。

### 終章 ミルからベイン、スペンサーを経由してルイスへ

以上において、ルイスが創発について、単に、要素の「配置」(組み合わせ)だけではなく、さらに、環境との関係においても規定される必要があると考えているということを見てきた。このような発想は、第二章において見たベインの思想とも類似している。しかし、ルイスは、環境と有機体との絡み合いが心の領域のみならず、生命の領域や社会の領域にも見られるとし、有機体を環境と融合したものとして考えようとしており、ここにベインとの違いをみることができる。

これに対して、ルイスとスペンサーとの関係は親和的である。まず、一方において、スペンサーは、ルイスによる生の定義を、全体としての有機体の絶えざる構造更

新に注目するものとして、重視している (Spencer1855:355)。そして、この定義こそが、分化した有機体の各部分が違った仕方で発達し、全体としての有機体が進化するというアイデアに結実することになるのである。そして、他方において、ルイスはこのようなスペンサーの考え方を後の著作で適切なものとして紹介している (Lewes1877:29)。スペンサーは『心理学原理』の第二版で心を環境や歴史との関連の中で考察しているが、ルイスは、その発想を受容して、意識を社会との関係の中で考察している。人間は同じでも環境が変わればふるまい方が異なるのだとすれば、そのふるまい方は、単なる原因の合成によって決まるのではない「創発的なもの」ということになる。そして、ルイスは、スペンサーによる諸観念の「生成」について言及し、それがのことを「創発的意識」の「生成」を説明するものとしている (Lewes1875a:245)。そして、スペンサーが生理学的な発達や社会の発達において並行的なあり方を見ていることに言及している (Lewes1875b:167,434)。さらに、ルイスはスペンサーの考え方を「生氣的なもの」を想定せずに生命を説明するものとして高く評価し (Lewes1877:69f)、賛意を示している (Lewes1879b:104)。その上で、ルイスはスペンサーがイギリスの哲学的思考の伝統を集大成する役割を果たしたとしている (Lewes1875a:84)。

創発という概念は J・S・ミルにおける異結果惹起的 (heteropathic) という概念に由来する。まず、ミルの発想を心理学の領域で展開したのはベインであった。彼は心理学を生理学によって補完することによって、自発性と見なされるものが神経系の引き起こす自発的運動とそれがもたらす快との結びつきによって成立するものであることを見いだした。ベインが心理学の領域の中で創発を考察するにとどまったのに対して、スペンサーはそれを領域を横断して成立するような一般的な法則として考えようとしている。そして、ルイスは、ミルやベインにおいて潜在的に含まれていた用法を、スペンサーにならって全面的に諸領域にも適用していくことによって、創発概念を集大成したといえるのである<sup>12</sup>。

#### 文献表

Mill, John Stuart

Mill, *The Collected Works of John Stuart Mill*, ed. J.M. Robson, 33 vols, 1963-1991.

Bain, Alexander

Bain1855, *The Sense and the Intellectual*, 1855.

Bain1859, *The Emotions and the Will*, 1859.

Bain1870a, *Mental Science*, 1870.

- Bain1870b, *Logic, part.1*, 1870.  
 Bain1870c, *Logic, part.2*, 1870.  
 Bain1872, *Mind and Body*, 1872.  
 Bain1873, *Logic, part.2, 2<sup>nd</sup>. ed.*, 1873.  
 Bain1894, *The Sense and the Intellectual, 4<sup>th</sup>. ed.*, 1894.  
 Bain1904, *Autobiography*, 1904.
- Spencer, Herbert  
 Spencer1852, "The Development Hypothesis", in *Essays: Scientific, Political and Speculative, vol.1*, 1891.  
 Spencer1853, "Universal Postulate", in *Westminster Review* 60, 1853.  
 Spencer1854, "The Genesis of Science", in *Essays: Scientific, Political and Speculative, vol.2*, 1891.  
 Spencer1855, *Principles of Psychology*, 1855.  
 Spencer1857a, "Progress: its law and cause", in *Essays: Scientific, Political and Speculative, vol.1*, 1891.  
 Spencer1857b, "Transcendental Physiology", in *Essays: Scientific, Political and Speculative, vol.1*, 1891.  
 Spencer1860, "Bain on the emotions and the will", in *Essays: Scientific, Political and Speculative, vol.1*, 1891.  
 Spencer1862, *First Principles*, 1862.  
 Spencer1864a, "The Classification of the Sciences", *Essays: Scientific, Political and Speculative, vol.2*, 1891.  
 Spencer1864b, *The Principles of Biology, vol.1*, 1864.  
 Spencer1867a, *First Principles, 2<sup>nd</sup>. ed.*, 1867.  
 Spencer1867b, *The Principles of Biology, vol.2*, 1867.  
 Spencer1870, *Principles of Psychology, vol.1, 2<sup>nd</sup>. ed.*, 1870.  
 Spencer1872, *Principles of Psychology, vol.2, 2<sup>nd</sup>. ed.*, 1870.  
 Spencer1904a, *Autobiography vol.1*, 1904.  
 Spencer1904b, *Autobiography vol.2*, 1904.
- Lewes, George Henry  
 Lewes1875a, *The Problems of Life and Mind, First Series: The Foundations of a Creed, vol.1*, 1875.  
 Lewes1875b, *The Problems of Life and Mind, First Series: The Foundations of a Creed, vol.2*, 1875.  
 Lewes1877, *The Problems of Life and Mind, Second Series: The Physical Basis of Mind*, 1877.  
 Lewes1879a, *The Problems of Life and Mind, Third Series, vol.1: The Study of Psychology: Its Object, Scope, and Method*, 1879.  
 Lewes1879b, *The Problems of Life and Mind, Third Series, vol.2*, 1879.

1 創発の概念史的研究を行っている著作、論文集としては次のようなものがある。(1) Beckermann, Ansgar et al. (ed.), *Emergence or Reduction?*, 1992. (2)

- Bedau, Mark A. et al. (ed.), *Emergence: Contemporary Readings in Philosophy and Science*, 2008. (3) Malaterre, *Les origines de la vie*, 2010. (4) Blitz, David, *Emergent Evolution: Qualitative Novelty and the Levels of Reality*, 1992.
- 2 以下ではミルの著作集からの引用は Mill- 巻数：頁数という形式で表示することとする。
- 3 拙論「〈創発〉概念の起源 (3)」兵庫大学研究紀要第 54 巻 (2019) はミル、ペイン、ルイスにおける創発概念の生成について論じたが、スペンサーからの影響については論じることができなかった。創発の概念史的研究もスペンサーについてはほとんど論じていない。そのため、本論は、上記拙論の記述と重なる部分もあるが、スペンサーから三者への影響関係を中心にして論じ直すこととした。
- 4 Mill, Bain's psychology. *Edinburgh Review*, 110, 1859, 287-321. Spencer, H. (1860) Bain on the emotions and the will. *British and Foreign Medical-Chirurgical Review*, 49, 42-52.
- 5 生理学的心理学の成立を告げるとされる Wundt, Wilhelm, *Grundzüge der Physiologischen Psychologie*, 1874, 1911<sup>6</sup>、Ladd, George Trumbull, *Elements of Physiological Psychology*, 1887、James, William, *The Principles of Psychology*, 1890 のいずれもがペインの名前を参照している。
- 6 本間栄男「アレグザンダ・ペインの感情論の構成」『国際文化論集』第 47 巻、2013、97 頁。
- 7 トムソン『心理学の歴史』(北望社) 1969:20
- 8 Morgan, C. Lloyd, *Emergent Evolution*, 1923, 1927<sup>2</sup>: 51, *Life, Mind and Spirit*, 1925:56f..
- 9 もう一つのきっかけは生理学の研究の受容であり、その成果は Spencer1857b に見て取ることができる。だが、この点については、紙面が限られているため、本論では触れることができない。
- 10 ルイスは「生理学における刺激、協働、放出は、心理学における感覚的惹起、論理的集合化、衝動のことである」(Lewes, PLM5,40) と述べている。
- 11 William Baker, "A Problematical Thinker' to a 'Sagacious Philosopher': Some Unpublished George Henry Lewes - Herbert Spencer correspondence", *English Studies* 56, 1975: p.218.
- 12 本研究は JPS 科研費 19K00005 の助成を受けた。